

あうる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

石狩のチョウザメ

「いしかり砂丘の風資料館」。紅葉山砂丘から出土したおよそ四千年前の「サケ漁の縄文遺物」をはじめ、石狩市の自然や歴史に関する資料を展示している博物館である。ここでひときわ目を惹くのが、一・九釐もある大きな「チョウザメ」の剥製。昭和四十四年に石狩川で捕獲されたもので、四本のヒゲと尖った口先が印象的だ。

チョウザメとは、普段は海にいて、四月・五月頃の繁殖期になると川を遡上する大型の魚である。

石狩川河口周辺や石狩湾で捕獲されたという記録や標本が、昭和四十四年のもののほか、平成五年、十六年、十七年の計四件。チョウザメは、不定期ではあるが、その姿を石狩に現わしているのである。いずれもタウリアアチョウザメという種類で、卵を塩漬けにすると、「黒いタイヤ」とも呼ばれる、あのキャビアになる。北海道には、このタウリアのほか、卵の粒が大きく、最高級のキャビアができるミカドチョウザメも生息していたという。

皇帝の魚

チョウザメという名前の由来は、サメのような外見と（しかし、サメの仲間ではない）、蝶の羽を広げたようなウロコの形から。二億五千万年〜三億年前から存在しており、古代から変わらぬその姿から、生きた化石といわれている。

チョウザメは卵だけではなく、肉も古くから高級食材として知られていた。古代ローマ帝国では「ロイヤル・フィッシュ」、中国では「煌魚」と呼ばれ、時の権力者が献上を所望したと伝えられている。

石狩川のチョウザメが歴史に登場するのは、江戸・享保時代の二七二七年。松前藩が「菊とじ鮫」の名で幕府に献上したのが始まりで、刀の鞘として珍重された。

北海道 歴史秘話 7



チョウザメといえば、フォアグラ・トリュフと並ぶ世界三大珍味のひとつキャビアで有名だが、この北海道でも、産卵期、たくさんのチョウザメが石狩川や天塩川をさかのぼっていったことをご存知だろうか？ かつて北海道は、チョウザメの宝庫だったのである。

信仰の対象

石狩の人たちも、昔、チョウザメを石狩川の主として崇めていた。三百年前、サケの豊漁を願って建てられたという石狩弁天社には、「江戸時代、ある年の秋、石狩川の河口に巨大なサメが現われ、河口に横たわってサケの遡上を止めた。困った場所請負人たちが弁天社に神として祀ったところ、サケの大豊漁となった」という伝説があり、チョウザメを神格化した「鮫様」が祀っ

てある。正式には「妙鮫法皇大明神」という。また、百五十年の歴史を持つ金龍寺にも、明治二十二年、お寺の有力な檀家だった漁業経営者・古谷長兵衛が「妙鮫法皇善神」という「鮫様」を奉納している。石狩の漁業者はサケ漁の神様として、チョウザメを篤く信仰していたのである。

絶滅の危機

石狩川をはじめ天塩川・釧路川・十勝川をたぐさんのチョウザメが遡上して

ても死なないということ。寿命は、何と四十年〜百年といわれている。そのチョウザメが、昭和の世になり、消えた。今ほとんどの種類が絶滅の危機に瀕している。チョウザメが消えた原因は、曲がりくねった川の直線化や河畔林を取り除く河川改修工事、そして乱獲だった。

復活の動き

すっかり北海道から姿を消してしまっただチョウザメだが、いま北海道の産・官・学そして道民が、それぞれの立場からチョウザメの復活を図っている。美深町ではチョウザメを人工飼育。町の振興事業として本格的な養殖を行い、キャビアなど特産品の開発に力を注いでいる。

サケの町として知られる標津町では、イクラを獲った後に廃棄してしまっただサケを、チョウザメの餌として利用し、キャビアを生産しようという循環型の飼育法にチャレンジしている。その他、茨戸川に自然林を復活させ、チョウザメが帰って来る川として再生を目指すNPOやチョウザメ絶滅種の孵化に取り組み北大水産学部など、いま北海道各地でチョウザメ復活の動きが起きている。

三十年前、「カムバック・サーモン」運動によって豊平川にサケが戻って来た。「カムバック・チョウザメ！」今、チョウザメを北海道に呼び戻すプロジェクトが、あちこちで動き始めている。



石川啄木・歌碑の前で

木原直彦さん

百姓の孫、商人の子

ふと、思ってみたのです。子供のころ、大正の前の明治はずっと遠い昔の世界でした。しかしいま傘寿を迎えて指折り数えてみると、明治維新から数えて百四十年のうち、わが人生はゆうに半分を超えている歳月なのだと思惑したことでした。

ぼくは昭和五年に胆振支庁管内勇払郡厚真町上厚真で水呑百姓の孫、小商人の子としての世に姿を現わしたのです。親は「ひどい不況のとき生まれたんだよ」と言い言いついていました

が、のちに、天皇の統帥権干犯問題が起きて軍国主義国家に突っ走って行く

運命の年だったと知り歎息したことでした。翌年に満州事変が勃発して十五年戦争に突入し、わが少年期はへ暗い谷間の時代だったとつくづく思います。

ぼくら一家は太平洋戦争がはじまった昭和十六年に軍需景気をあてこんで重工業都市の室蘭に移りました。家に本など無かったのに、どうして小説など好きになったものか。そこに、明治期に富山県から移住した祖父の生きざまを通して北海道開拓のことが重なるみたいですね。いつとはなし、北海道を描いた作品に関心が強まってゆけ。

札幌転居

戦争に負けて、勤めるようになって、

表現欲が湧くままに同人雑誌を作りはじめます。今から五十六年も前の昭和二十八年、二十三歳のときで、「文学者と北海道」という連載が発行進んでした。

昭和三十六年、一大転機が訪れます。勤め先の役所が丸ごと札幌に移転したのでした。やがて「北海道文学」を創刊し、それが昭和四十一年の画期的な北海道文学展の開催につながってゆきます。気運のおもむくところ、翌年に任意団体の北海道文学館が設立。そのとき、お遊びの一つとしてはじめてのがバスによる文学散歩でした。理事長の更科源蔵さんをはじめ和田謹吾、澤田誠一、小笠原克、佐々木逸郎、西村

信といった人たち。

のちに北海道新聞社とタイアップして、結果的に北海道じゅうを廻りました。いわゆるフィールドワークであり、この現地に学んだことはじつに大きかった。そのおかげで「北海道文学史」全三巻とは別に、「北海道文学散歩」を全四巻にまとめることができたのです。この六月に中西出版から「北海道文学の足音」を出してもらいましたが、そこに収めた「小説の舞台」と「作家の生地」を作成しながら、つくづく思った。ぼくが北海道文学の研究に手を染めたときとはおちがいが、人も作品もまことに豊かになっているということ。東京と大阪圏を除き、いまや北海道は県単位でみて最右翼といっているでしょう。

文学碑と文学館

さらに文学の旅でいえば、かつてとは比較にならないほど文学碑に出会えるようになったことがあげられます。有島武郎、国木田独步、石川啄木、小林多喜二、葉山嘉樹、中村武羅夫、子母沢寛、本庄陸男、辻村もと子、島木健作、伊藤整、亀井勝一郎、八木義徳、船山馨、原田康子、三浦綾子、渡辺淳一、岡田三郎、森田たまなど、日本文学を代表する顔ぶれがずらり。その多くの建立にかかわっただけに、感慨深いものがあります。

文学館のことも、想い出がつきません。本格的な文学館は昭和三十八年に高見順や伊藤整らが東京で日本近代文

学館を立ちあげたのが最初ですが、地域総合のものとしては北海道文学館が初名乗りだったのです。昭和四十二年のこと、以来、道内には函館・小樽・室蘭・旭川という主要都市のほか遠軽町生田原にはオホーツク文学館ができ、井上靖・三浦綾子・渡辺淳一の個人館や和田芳恵らの記念室なども御目見えて資料の集積が進んでいます。それぞれの文学運動の拠点になっているのも嬉しい限りなんです。

北海道の文学は北海道の風土を土壌にして生成しているのは当然のこととして、いつも強く思うのは、道産子作家の「内なる眼」と来道作家の「外なる眼」が重層的に車の両輪になっている点です。これからも日々の動きを注視してゆきたいですね。

そうそう、ぼくは情報源の一つとして新聞は欠かせませんが、大手の出版社で発行しているPR誌も重宝しています。つい最近も、伊藤たかみに「海峡の南」があることを知りました。北海道に帰郷した男の物語だそう、読むのを楽しみにしています。北海道ゆかりの人と作品が陸続の状態、目が離せませんですね。

木原 直彦 きはら なおひこ

昭和五年胆振支庁管内厚真町上厚真で生まれる。四十一年北海道文学展実行委員会事務局長、四十二年北海道文学館事務局長、のち館長。平成七年に財団法人北海道文学館副理事長と館長を兼ねる。現在は同顧問と名誉館長、日本文芸家協会会員、オホーツク文学館顧問、NPO法人さっぽろ時計台の会会長、札幌市民憲章推進会議議長など。

Dilettante 悠々人語録

永年にわたり北海道と文学のかかわりを数多く発表してきた北海道文学館名誉館長の木原直彦さん。新たにこの6月「北海道文学の足音」を刊行しました。道内の文学を探索し続ける木原さんの悠々人語録です。

MY OLDIES

昭和時代のデザイン

手で文字を「描く」レタリング。書道でない。ペン習字のようなものでもない。一般にいわれるところの、達筆であるとか、悪筆であるとかという次元の話とは別のところに『レタリング』の技術があります。

レタリングとは、書き綴られた文章や、一気呵成に書き上げられる書道とは違い、デザインし作図しながら描いてゆく「造り文字」といえます。そういう意味では絵に近いといえるでしょう。

グラフィック・デザインの世界でも、かつてはレタリングの全盛時代がありました。印刷中心のグラフィック・デザインは当然活字が多いのですが一九六〇年代までは鉛の活字を組んで使う「活版」が主流でした。しかし、この鉛の文字は膨大な重量と保管場所を必要とするため、書体の種類は少ないものでした。文章文

字なら、ほとんどそれで問題はないのですが、デザインが進化してくるにつれ、それでは満足できなくなってきました。文章として読むための文字と、見出しや、タイトルのための文字では、同じ明朝体でも違う必要があります。イヴェントの名称や、本のタイトルにはもっと目を引く変化のある文字がほしくなるものです。そんな必要から、レタリングはデザインにとって不可欠のものになりました。

私のように六〇年代にデザインの仕事に就いていた者にとってはまさに、レタリングはデザイナーの必須条件だったのです。レタリングに定義はありません。もちろん初心者用の検定基準はありますが、実際の現場ではプロの目から見て「良い字」「良くない字」かだけ。これは理屈ではなく体得するしかない世界なのです。まさに職人芸といえます。

言いかえれば、良い字を描くためのマニュアルもなければ、コツもなくて、究極的には持って生まれたセンス感覚が上まさを決定するのです。

レタリングには筆、製図器、ペンなどを使いますが、柔らかな線が欲しいときは『ミゾ引き』を使います。ミゾ引きとは、溝の彫り込まれた竹の直定規にガラス棒と筆を簪のように持つて曲線や直線を引いてゆく技術です。大道芸とすれば、外国でメシが食えると言った人がいましたが、今はこのテクニクも、使える人はそう多くはいないでしょう。

七〇年代に入り印刷原稿は、印字された印刷紙を切り貼りする写真植字が主流になりました。書体は飛躍的に増えましたが、レタリングはまだ健在でした。

しかし、近年のデジタル化によって文字は、変形や加工までがキーボード操作ができるようになり、手描きした文字に製版を組み合わせて、効果を出す方法さえ必要なくなってきました。

つまり六十歳を過ぎた私のようなデザイナーが、おそらく最後の「手で文字を描いた世代、ミゾ引きを使える世代」ということになるかもしれません。

(S・U)

BOOK INFORMATION

一冊気になる 大人科学マガジン

『大人の科学マガジン vol.19』
ふろく「ガリレオの望遠鏡」
大人の科学マガジン編集部編

学研刊
定価二、三〇〇円
(税込)
二〇〇八年
三月二十八日発行



今年是世界天文年二〇〇九ということで、星好きとしては天文に関する本を紹介したいと思います。

今年の夏には皆既日食があったり、十五年周期の土星の輪の消失があったり、その外側にもっと大きな輪が見つかってみたり。

そもそも世界天文年（IYA）って何？ と思っている方も多いと思います。今から四〇〇年前の一六〇九年は、ガリレオが初めて夜空に望遠鏡を

なのです。そんなわけでガリレオ望遠鏡を作りました。ガリレオ式望遠鏡は対物レンズが凸レンズ、接眼レンズが凹レンズの望遠鏡のことを指します。この場合視野が狭くなりませんが正立像が見られます。なるほど、知りませんでした。勉強になります。

な。ふむふむと読みながら組み立てること三十分。やっぱりうまく望遠鏡が作れませんでした。紙の鏡筒がうまく丸まらずばこぼこです。糊も

向けた年です。世界中の人が夜空をはみ出して所々汚い。……これで本見て、様々のことに思いを馳せ、自当に見られるのか？

と、いうわけで。IYAの企画の国連、ユネスコ、国際天文学連合がその節目の年として定めました。

本の中身はガリレオについて様々なことを書いていますが、「科学と学習」といえるこれ。「ふろく」。

小学生の頃「科学と学習」で育った私としては、ふろくが本で本がふろく。不器用ゆえにうまく作れたガとアルティールにお祈りした次第です。

(H・W)

道展

北海道美術史
エピソード

創立のころ

苦名 直子

一九二五年、道展創立

今年も道展（北海道美術協会）が十月二十二日から開かれる。第八十四回目とすることで、その歴史は大正期にさかのぼる。今田敏一著『北海道美術史』（北海道立美術館発行、一九七〇年）によると、道展結成の口火を切ったのは、竹内武夫兼平英二（示）、加藤悦郎の三人であった。ある夜、彼らは酒を飲み交わしながら北海道全体を総合した展覧会を構想。そのアイデアが、当時札幌や小樽で活動していた絵画グループに伝えられ、やがて関係者たちが中島公園に近い本間紹夫の別荘・胡蝶園に集まり、最初の合同会議を開催した。その後も会合をくり返しながら準備が進められ、一九二五（大正十四）年十月の第一回展覧会にこぎ着けたのである。

本間紹夫と胡蝶園、そしてサルカニ

この胡蝶園の主・本間紹夫は、自身も絵画や工芸品制作を手がけ、道展の創立会員であった。家業は札幌の老舗印刷会社・北海石版所である。胡蝶園について今田は「公園の東、豊平川寄りの池と木



図1 本間紹夫〈前田氏一時昆虫となり名声を博す〉本間家蔵

立のある別荘で、初期道展の基地であった。ここで多くの重要会議がひらかれ、また多くの若い美術家たちが交歓した。そこで生まれた智恵と友誼は、その後の道展の礎石になった。」と書いている。その言葉どおり、遠来の客はよくここに滞在して札幌滞在をたのしみつつ、仲間と大いに交流したという。中村善策と前田政雄は、ここに半年もいた。上野山清貢も、別荘に三ヶ月ほど滞在している。

彼らの楽しみは、サルカニつまり池の清水に冷やしたビールであった。サルカニと命名したのは中村善策である。そして日本酒は日本サルカニ（このことになった。このサルカニを飲みつつ語り、隠し芸も出て、若い美術家たちは無邪気に遊んだのであった。図1は、そつした余興の二コマを描いた色紙。版画家として知

られる前田政雄が、着物をかぶって蟬を演じている。どっとわき起る笑い声……。そのような雰囲気の中で培われた人々とのつながりが、道展の結束・発展を大いに育んだことであろう。

可愛いモデルさん

本間紹夫が、そつした美術家たちの朗らかな輪の中心にいたことから、自然、本間家の子ども達も彼らにかわいがられ、絵のモデルともなった。また本間自身が子煩悩であったのだろう。子ども達の姿を油彩や色紙に残している。

図2は、本間の道展第一回展出品作。長女をモデルとしている。あどけない少女のまわりは、しゃれたデザインのイスとテーブル、エジプト柄のローケツ染め、チェロ、オルガン、お面、アイマスクなど、心躍るようなアイテムで満たされ、この部屋の主が文化的で多趣味であることがつかがわける。

他方で、背景が黄色一色に塗られた図3は、三岸好太郎の作品。本間の次女をモデルに描いたものである。背景描写のない分、まず飛び込んでくるのが、少女の困ったような表情。三岸の大きなアゴと鋭い目付きが怖かったようだ。子ども



図2 本間紹夫〈室内〉1925年、北海道立近代美術館



図3 三岸好太郎〈赤い服の少女〉1932年、北海道立三岸好太郎美術館蔵

好きの三岸にとっては、その素直さが何ともかわいらしく映ったのではないだろうか。ちなみに白いひだ飾りがついた赤いワンピースは、札幌で評判の洋装店「リリース」であつたものという。このリリースの女主人をモデルとした絵が〈裁縫婦〉（一九三三年、北海道立近代美術館蔵）である。作者はその夫で、同年三十二歳の若さで世を去った山本菊造：といふふうに、人のつながりが次々と作品を生み出し、物語は続いていく。

十月三十一日から二〇一〇年一月十七日まで、北海道立三岸好太郎美術館（北二西十五）では、特別展示「北海道美術史エピソード―道展創立のころ」を開催。本間家や北海道立近代美術館所蔵の作品や資料をとおして、道展初期の心温まる人物交流を紹介しつづけます。寒い季節を迎えますが、三岸美術館で暖まって行きませんか。（北海道立三岸好太郎美術館学芸員）

第八十四回 道展

十月二十二日（木）

十一月八日（日）

札幌市民ギャラリー（南一東六）



■編集部から「本会ハ本道ニ於ケル美術ノ向上普及ヲ図ルヲ以テ目的トス」創立時の北海道美術協会の規約である。創立会員31名、北海道初的美術団体が誕生した。現在は会員227名で道内最大の公募展。第1回一般搬入数536点、紆余曲折を経て今年搬入653点。「若者の公募展離れ」と言われて久しい。一般出品数減傾向の歯止めを「道展U21」を復活、若い出品者増が期待される。創立時に生まれた「智恵と友誼」が受け継がれている。小生が道展長い歴史の中の一時期、微力ながらも関わりを持てたことは喜びであり、誇りである。（K）

●発行・編集／中西出版あうる編集部
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
TEL (011) 785-0737 FAX (011) 781-7516
URL: <http://owl-online.jp>
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp

●発行責任者／林下英二

●発行日／2009年10月20日 ●デザイン／上野修一

ホームページへ
アクセス！